

平成30年度第2回米子市総合教育会議録

○日時

平成31年2月20日（水）午前9時30分から11時

○場所

米子市役所402会議室

○議題

- (1) 切れ目のない支援体制について
- (2) ふるさと教育について

○出席者

市長 伊木隆司

教育長 浦林実

教育委員 金山正義

教育委員 荒川陽子

教育委員 杵村由紀子

○欠席者

教育委員 上森英史

○出席職員

総合政策部長 大江淳史

総合政策部次長兼総合政策課長 八幡泰治

総合政策部総合政策課まちづくり戦略室長 倉本樹

総合政策部総合政策課主任 宮本朋子

福祉保健部長 斉下美智子

福祉保健部こども未来局長 景山泰子

福祉保健部こども未来局こども相談課長 橋尾宏紀

福祉保健部こども未来局子育て支援課長 湯澤智子

教育委員会事務局局長兼教育総務課長 松下強

教育委員会事務局主査兼教育総務課教育企画室長 松浦俊介

教育委員会事務局次長兼学校教育課長 金川朋史

教育委員会事務局学校給食課長 山中敦子

教育委員会事務局生涯学習課課長補佐 安田至人

○傍聴者数：1人

※読みやすさ等のため、発言の趣旨を損なわない範囲で、重複表現、言い回しなどを整理しています。

○八幡総合政策課長

それでは、ただ今から、平成30年度第2回米子市総合教育会議を開催いたします。

議事までの進行につきましては、総合政策部の八幡の方で進めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

なお、本日は、上森委員さんが欠席とのご連絡をいただいておりますので報告いたします。

では、米子市長がごあいさつをさせていただきます。

○伊木市長

改めましておはようございます。本日はお忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。委員の皆様におかれましては、日ごろより本市の教育行政に様々な角度から貴重なご意見をいただいておりますこと、重ねてお礼を申し上げます。

昨日、新年度の予算について議会に説明させていただきました。当初予算としては過去最大690億という数字が出ておりますけれども、教育予算につきましても、大物が多かったものですから、全体としては充実した予算になったのではないかと考えております。その中で、例えば教育委員会がずっと進めてきております「保小連携」という考え方がありまして、保育園から小学校に上がる、切れ目のない支援ということに取り組んでいただいております。その中で、啓成小学校が老朽化しておりまして、これを新しく作り直すことを計画しておりますけれども、博労町にある東保育園の老朽化と周辺の道路の狭あいの問題がありまして、この際、啓成小学校の建替えに合わせて、東保育園を啓成小学校の敷地内に移設することによりまして、全員が啓成小学校に上がるわけではないかもしれませんが、それでも、小学生と身近なところで保育を受ける環境を整えて、保小連携をハード面でも実践していこうということで、来年度は調査費と設計費を計上することになりました。それから、教育委員会に直接関係はないんですけれども、プラネタリウムの老朽化が長年懸案になっておりました。この機材一式が非常に高額なものでしてなかなか財源の目途がこれまでつきませんでしたけれども、31年度はなんとかこの財源の目途をつけまして、プラネタリウムについても最新のものに更新、投資をしていこうということで予算計上させていただきました。まだまだ教育面では不十分な点があるということは認識しておりますので、この31年度当初に限らず、これから先も必要な物については、優先順位を付けながらにはなりますけれども、教育予算の充実を図っていきたいと思っております。従いまして皆様方にはこれからもいろんな形で貴重なご意見をいただければ大変ありがたいと思いますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

本日は平成30年度第2回の総合教育会議となります。二つのテーマを準備しております。一つ目が「切れ目のない支援体制について」、もう一つが「ふるさと教育について」でございます。このことについて、皆様方から忌憚のないご意見をいただきまして、これから先の教育行政の充実につけていきたいと思っております。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○八幡総合政策課長

ありがとうございました。

続きまして、教育長よりごあいさついただきたいと思います。

○浦林教育長

皆さんおはようございます。本日はお忙しいなか、お集まりいただきありがとうございます。先ほど市長からお話がありましたが、予算について、教育に投資して下さってありがたく思っております。私も教育長になって一年近く経ってきまして、外に見える形、また、見えない中を充実させる形で一生懸命取り組んできたところでございます。

前回の総合教育会議において3つのテーマでいろいろご意見をいただいて、お知恵を拝借したところでございまして、ただ、話し合うだけで終わるということが私の性分に合わないものでして、それを具体化していく、実現していく、そしてそこでまたご意見をいただいて、より良いものにしていきたいという思いをもっております。前回あった3つのなかで、今回は教育委員会として今後考えていく方向性を、少し資料等でお示しをさせていただきながら、さらに次のステップに行くような会議になればというように思っております。皆さんのいろいろなご意見をぜひお聞かせ願って、子ども達、市民のために役立つ教育ということで進めていただきたいと思いますので、今日はどうぞよろしく願いいたします。

○八幡総合政策課長

ありがとうございました。本会議につきましては、市長が議長となっておりますので、議事の進行につきましては、市長の方でよろしく願いいたします。

○伊木市長

そうしますと、議事次第に従いまして、議事の進行にいきたいと思います。まず「議事(1)切れ目のない支援体制について」、まずは事務局の方から説明をしていただきまして、そのあと皆さんからご意見等いただければと思いますので、説明をお願いします。

○景山子ども未来局長

子ども未来局より資料1の下の緑の点線より下の部分について説明をさせていただいて、その後に教育委員会事務局にバトンタッチさせていただきたいと思っております。

今年度4月、ふれあいの里3階に「子ども相談総合窓口」を設置いたしまして、同時に5歳児健診を開始いたしました。5歳児といいますと、ちょうど年中児にあたります。年中になられるお子さんに、年に数回に分けまして、5歳児健診を全員対象で実施をしてみました。1次健診といたしまして、全世帯にアンケートをお出しして、その結果に応じて、課題のありそうなお子さんに対して2次健診をご案内して、発達相談であるとか子育て相談といったところを順次ご案内するという流れになっております。今年度、実施いたしましたけれども、5歳児の年中児限らず、その前から私どもと繋がっていただいて、適切な支援に繋がっていきたく思っております。特に、園に専門職員が巡回に参りまして、保育士さん方とやりとりをするなかで、個々のお子さんに支援が早期に届けられるよ

うに、工夫をしてきたところでございます。

1年間実施しまして、結果ですけれども、担当の方からの課題として出てまいりましたのが、この健診に対する周知をもっと積極的に行っていかなければいけないということ、それから相談の対象にはならなかったけれども、困り感を持っていらっしゃる保護者の方の今後の対応をどうしていくのか、どう拾い上げていくのか、というところ。それから、専門の相談の中で、早期に医師に繋がった方がいいと思われるケースについて医師に繋がらなかったというケースがありました。今後に向けて、それらの課題解決に工夫をしていかなければならないと考えているところです。

5歳児健診という初めてのメニューもありますけれども、そこから資料1の上にながらっていき、切れ目なく支援を、特に支援を就学前から就学後に繋げていく工夫を、今年度特に、教育委員会と頻りにやり取りをさせていただきながら、仕組みを作って参ったところです。実は、それまでやっていなかったというわけでは決してなくて、特に校長会の方が主体になっていただいて、校長会主催で保幼、就学前の施設の職員さん方を集めていただきまして、意見や情報交換の会を持っていただいているところではございましたけれども、これを膨らませていきながら、より密に連携をとっていく仕組みを、今年度、教育委員会さんと一緒に考えてきたところでございます。

まずは、顔の見える関係をしっかりと作っていくという点で、特に地域の保育園、幼稚園の園長先生、職員の皆さんと、それから小学校の先生方が情報交換をする。それから、その情報交換に使うツールといいますか、様式などについて工夫をしながら温度差のないようにそれぞれの所が適切な支援を繋いでいくための情報をいかに伝達していくかという工夫をしていくというようなことを今年度1年間かけて考えてまいりました。

まず、小学校に入るまでに適切に対応していくための職員たちの資質を上げていく、そして良い関わりを持ったものをきちんと小学校に伝えていくということが非常に大切でありますので、来年度も引き続きこれをどんどん膨らませていきながら、より良いものとして実施していけたらと思っております。

○金川学校教育課長

それでは、景山局長より今年度の概略について話がありましたので、今年度の具体的な取組について資料を使いながらお話しさせていただきたいと思っております。まず、現状として平成29年度末より米子市こども未来局と学校教育課、小学校長や園の代表の方に集まらせていただきまして、現在の課題等についての検討会を行いました。その中で、現状として新入生、小学校低学年での不適応ということがありました。なかなか椅子に座っていられない、落ち着かない状態であるとか、不登校というようなことも増えてきているということが挙げられました。5歳児健診という事もありますが発達障がい、それに類する、いろんな特性をもった子どもたちが生活しています。そのあたりの指導であるとか情報交換が必要ではないかという事が課題として出てきました。その中で、今年度考えましたのが、一つは、子ども達の様子や有効な指導についての情報交換、それから保幼小のカリキュラムの違い、これをスムーズに移行していくためのこと、それから園児が入学するまでのスムーズな移行をどうしていくかということで、今年度いくつかの試みをしております。

資料1をご覧ください。先ほど期待される効果ということで話をさせていただきました。

2点ございます。今年度初めてですが、6月に園長、小学校長による顔合わせ、それから説明会を行いました。今年度こういった形で課題を解決していくという事で説明会、並びに、いま先進的に園と小学校の交流をしている学校からの実践発表をしてもらい、その後、各中学校区の園長、校長でこれからの交流について話をしました。そしてその後、情報交換会ということで、子どもたちの情報を伝達することで、今まではもう少し遅い時期に、各小学校が園に聞き取りに行くことがありました。多い学校では、一つの学校に30の園から新入生が来るということで、大変な作業がありました。時期的に、遅くなるとなかなか子どもたちの顔を見に行くことができないということから、ある程度ブロックを決めて、情報交換をしたい小学校に対して、その会場に園の方に来ていただいて、効率よく情報交換ができるように、4日間くらいですべてが終わるような形にして、夏休みに実施しました。

その後10月に、これは今までもあったことですが、就学時健診があります。ここで、先ほど情報交換した子ども達の様子もここでも1回確認できるということでありました。

そしてこれは3年目を迎えましたが、小学校長会主催で就学前教育を語る会という事で、年々、内容については、かなりどの校区も交流が進んできていること見受けられました。そして新入生説明会が2月にあり、もう一つ、就学予定児引継ぎシートというのがありますが、発達障がいばかりではなくて友人関係であるとか、アレルギーのことであるとか、そういう子どもたちの情報をシートに挙げてもらいまして、小学校と交流して、その後、組替の資料であるとか、入学後の指導に役立てるという形で、このシートの作成も行いました。これが今年度の取組となっております。

来年度につきまして、少し変更点、または追加という形で考えております。一つは、今年の課題を各園それから小学校から出してもらいました。その関係で、就学予定児引継ぎシートの作成というところが、2月になっていまして、間際なのでなかなかもう1回情報交換できないということでもう少し早い時期に、その後で小学校が気になるところを園にもう1回聞き取りをする、というところを来年はしようということしております。それから来年、ひとつ大きな追加としまして小学校オープンスクールという形を考えております。資料2・資料3をご覧ください。「米子市小学校オープンスクール（仮称）」ということで3カ年計画でということを書いております。どういうことかと申しますと、「オープンスクール」これは今、各園の交流となりますと、縁のある小学校との交流になります。ですが自分がこれから行く学校、4月に入学する学校に出向いて、いろんな体験をするというところがこのオープンスクールになります。目的としましては、一つは子どもたちが学校に行っているいろんな体験をする。校舎の中を見て回る。トイレひとつにつきましても子ども達には不安材料のようなので、その辺りを校舎を見て回ったり、体験授業を行ったりというようなことで、小学校に対しての意欲、楽しみを作っていくということが一つです。それから保護者に対しましてもなかなか保護者も外から来たりとか初めてのお子さんだとかということでもなかなか知り合いもない相談できる人がいない不安もたくさんあるということで子育てについての研修であるとか、横のつながりまたはPTAの先輩方との交流等で保護者の不安感を取っていく、そういう目的でこのオープンスクールを計画しております。3年計画で、来年度からでも一斉開催という形を取りたいところですが、なかなか準備段階でもありますので、今考えておりますのが、来年度は5地域のモデル校でまず開

催して、どういう取り組みがいいのかということを検証する形をとります。次年度は一斉ではなく中学校区ごとに開催していくという形。3年後に全体での一斉開催という形で行っていくということを計画しております。まだこれから準備段階となりますが、こういう形で来年度進めて行こうと考えております。

○伊木市長

今事務局の方から取組について説明してもらいました。一つのポイントは市長部局としては学校現場の課題に対してできるだけ早い段階で、これは5歳児検診もそうですけれども、できるだけ早い段階で把握をして、そして教育面との連携の中で幼稚園もありますけれどもそういった課題を先生方保育士さん達にわかりやすくしていくということ。これはまだ道半ばではありますけれども。そしてその事を先ほども出た「修学予定引き継ぎシート」このような手段を使いながら小学校にも連携をしていくことで、少しでも小学校との切れ目のところでいろんな不安定感を解消していきたいという取組をしているところでございます。今の事務局からの説明につきまして、あるいは皆様方の考えでもお伺いしたいんですけども、何かご意見がありましたらいただきたいと思いますがいかがでしょうか。

○金山委員

今日、二つのテーマでございまして、今日の新聞を見てみますと、いろんなことがあるなということが結構出ておりますけれども、例えば、大津の自殺の訴訟判決が出て、ほとんど被害者側が勝訴したということで、こういう児童生徒の自殺が平成で裁判になったということがありました。千葉の虐待死の事件、あるいは子どもの貧困、そういったニュースを連日のように見ますと、ひょっとして、もう少し幼保小、中も含めてですけれども、連携ができていれば防げたことがあるんじゃないかという気がするんです。例えば児童生徒が小学校に入ってから「不適応」というんじゃないしに、もうすでに園の段階で不適応とか、あるいは逆に、育ちと中一ギャップの、小中の問題もありますけれども、今回は、特に幼保小の連携についてというのが大事なところかなと思います。今まで私たちは幼保小、私は学校現場で管理職をしていた経験もありますので、とにかく就学時健診までにきちんと把握をしておこうということで、就学時健診までには、予定児童のいる園、何園だろうと全部回りました。綿密なメモを取って、特に子どもさんも見させていただいて、これは要注意だなという方は就学時健診に何とか保育者に面談を勧めるということをやってきましたけれども、それでもやっぱり足りない。今課題に教育委員会が上げているのは就学時健診で分かった時にはもう遅い場合もあるので、年長児童についても、この6月7月あたりの一番大事なところが抜けているんじゃないか、前の年にもうちょっときちんとできることがあるんじゃないかということです。私は10月の就学時検診でいつもそう思っておりましたが、入学してきてすぐに完璧にできるかということ、連携が難しいところもありまして、遅くなると新入生説明会が2月にありますので、2月はもうはるかに遅い。例えば、特別支援の申請をしようと思うと、12月までに、特に11月には決めておかないと、2月頃に言っても遅いわけです。そういった、どの子も漏らさない体制というのが「切れ目のない」という支援体制に結構網羅されておりますので、私も今後これがどうなるか頑張っていけないけんという点と、もうちょっと皆さんからいろんな意見

をお聞きしたい、市長さんのご意見もお聞きしたいと思っておりますのでよろしくお願ひ
します。

○伊木市長

いわゆる早めの把握という点では、現在始めております5歳児検診をもう少し充実とい
うか、先ほど子ども未来局長からもありましたけれども、周知しているところでありまし
て、把握という事を進めていきたいと思っております。

○杵村委員

切れ目のない支援体制ということで、教育委員になってから、あるいはその前もそうだ
ったんですけども、自分の中で決め言葉というか、念じていることとして、「子どもを産
み育てるなら米子市で」というのがありまして、また、親としての合言葉は、何年後かに
「米子で子どもを育ててよかった」ということが内外に言えるような支援体制、環境であ
ったらいいな、ということをいつも肝に銘じて対応しているつもりです。特にこの米子の
子は、私は「米子の子」という言葉が、「うちの子」みたいで、大きな意味で育てているな
って感じがしてとても好きなんですけど、米子の子は公立校にほとんど行くじゃないですか。
一部を除いて、自分の育った地域の学校が自分の行く道になっていて選べないという状況
にあるんですけど、私も保護者として思い返してみると、最初に幼稚園から小学校に上がる
時、ものすごく不安でした。というのは、高校生が大学に行く時にはいろんな学校にオー
プンスクールがありますが、この学校に行っていないだろうかという不安がすごくあって、
ましてや、私の校区はたくさん的人数がいましたが、校区内には保育園等がなかったので、
あらゆるところに通う子が集まって、入学のときに「はじめまして」という状態でした。
保護者もものすごく不安だったので、そういった面からもこのような支援があるというのはと
てもありがたく、子どもはもちろんですけれども、親としてもものすごく安心感がありま
す。保護者の不安というのは、子どもたちがこの学校に行つて、あるいはこういう子ども
のいる、こういう環境に入れるというのがとても不安で、でもそれは、そういう子がいる
のが問題ではなくて、そういう子ども達に対してどういう体制をとっているか、というこ
とが伝われば、保護者は安心できると思うんですよね。この間、個人的な保護者が語る会
というのに参加しまして、「何年何組にはこういう子がいて、うちの子がこうで」というよ
うな、ざっくばらんな会だったんですけども、その子がいることで心配するお母さん方
が多かったんですけど、私があえて言ったのは、「その子がいるのが問題ではなくて、その子
がいることに対して、学校側や先生がどう対応しているかというのが問題なのだ」という
ことを伝えたかったという思いがあります。そこで、「子どもを産み育てるなら米子市で」
ということ、ぜひ一連の計画と同時に、どんどんキャッチフレーズとして、市内外に、「米
子で子どもを産むとこういうことがあります」とか「子どもを学校に入れるというのはこ
ういうことです」ということを、大きな声でアピールされたらいいんじゃないかなと思ひ
ます。

○伊木市長

これから、教育委員会ではモデル校を作りながら、支援体制について先行的な取組をし

ていってもらふことになります。いまは試行錯誤の様子ではありますが、これを、より分かりやすい一つのパッケージとして、「米子方式」と言えるような教育支援体制というのを、一緒に作り上げて、PRしていきたいと思っております。

○荒川委員

私自身も、この取組について伺った時に、一番に思ったのが羨ましいなということです。というのが、私自身が通り過ぎてしまった道でして、羨ましいなという思いと、そうやって大切に育ててもらった子ども達って、それ自身が、次の議題ですけれども、ふるさと教育にも通ずるものがあるなと感じました。保育園幼稚園から小学校に上がる時には、杵村委員さんがおっしゃったように、親も子も不安で、そのところをフォローしてくださって、だいぶ前から校舎の造りですとか、そういったところが確認できれば、家庭でも準備ができることがありますし、とても心強いなと羨ましく感じました。

私自身は「産み育てる」の「育てる」部分しか米子ではしておりませんで、米子に転居してきて、孤独感を味わい、話し相手がいないというのを経験しております。まず行く小学校を調べて、どの園から子どもがたくさん入学してくるかを調べて、どの幼稚園に通うかを決めたんですけれども、通園バスも自宅にバスを回しますと言っていただいて、話し相手が無く、幼稚園に行っても私自身、話し相手がなかったことを今も鮮明に憶えているんですけれども、そういったなかで、周りの方々に恵まれてこうやって活動させていただいているんですが、当時、金山委員さんも先生の立場でご尽力されていたようですが、小学校に上がる前にそういった話が伺えたら、家庭で準備ができたらと思うことが何度かありましたので、今の段階でも、今からの子ども達に対する熱い思いがひしひしと伝わってきて、とても羨ましい取組だなと言う風に感じています。

○伊木市長

やっぱり時代認識として、新しい時代に完全に入っているなという思いがあります。一昔前、もちろん今もですけれども、家庭教育で本来終わらせておくべき話が、保育園、学校にまで上がってきている。いわゆる「しつけ」の方ですね。この議論は前々からあったんですけれども、今の時代になると、ほとんどの親御さんが働いていらっしゃる、これを前提にした教育にしていかなきゃいけないということです。ちょっと前だと、少しとまどいもあったところですが、米子市はこのような形で、そこはそういうものとして踏み切る。やはり現場の苦労というものは、一番最前線で皆様方が感じているところですので、時代認識というものを我々の世代がしっかり持っていかなきゃいけないと思います。家庭にももちろん、働きかけや呼びかけはこれからもしていかなければいけませんけれども、一方で現場のことを考えると、こういったことを組織的に、子どものしつけとかそういったところからしていかなければならない。そのための状況把握であり5歳児健診である、ということを前提として考えておかなければならないという風に思っております。それとともに、私の立場から言うと、教育委員会の仕事が煩雑にもなってきますので、ぜひとも取組の効果検証といえますか、これはやったけどあまり意味がなかったねとか、これはすごく効果があったねとか、そのあたりをモデル校における取組のなかで、しっかりと検証してほしいと思います。そうすることによって、皆さんの言われるように米子の教育

も含めた子育てというものが一層充実して、いわゆる米子方式が確立していくのではないかという風に思います。そこは、大きな期待をしつつ、また私たちもしっかりサポートしながら考えていきたいと思っております。

それでは、教育長さんからお願いします。

○浦林教育長

小1プロブレムだとか、中1ギャップとか言われて久しい時代が続きました。私も、県の教育委員会におったり、学校で校長をさせてもらったりして、いろいろ見ていくなかで、ちょうど米子市が5歳児健診を始めるというニュースを見て、本当に素晴らしい取組、大きな一步を踏み出されたな、というのを近くに勤めている者として思いました。私も課題としてここを乗り越えないと、学校教育も苦しくなると思っておりましたので、本当に大きな第一歩、これがまずないと、いま私どもが申し上げている提案もできなかったという風に思っております。

保幼小の連携が必要だという事は多く言われてきているわけですが、じゃあそれを誰がどう動かすかといった時に、例えば、いま米子では小中一貫教育って、同じ教育委員会が所管している小学校と中学校の連携でも相当苦勞してきた経過があります。今度はそれを、所管を離れた、市長部局の所管の保育園等とどう連携するかというのが大きな課題だったんですけれども、今回こうして全庁的に取り組んでいこうということになったというのは本当に素晴らしいことだと思っております。

これがなかったらできなかった、進められなかったところなんですけれども、そこは大きな前提になっていました。小1プロブレムって言うていたんですけれども、学校に入ってみると、小学校1年生だけの問題ではなくて、小学校低学年がかなり苦しくなっていると校長として実感しました。小1が最初の方にざわついて、2学期になったらいい具合になっているという時代は少し超えて、それが長くなるような傾向がある、または一部にそういう子どもが継続しているような状況があるという風に思いました。資料1の「期待される効果」の中に入っているんですけれども、調べてみたら、西部地区圏域全体で下学年の不登校が増えているということがはっきりしました。4年生以上、中学生というのは、かなり安定しているんですけれども、小学校下学年での不登校が多すぎるということが大きな課題だと思っておりました。また、学力の問題に目を移しますと、ある学者に言わせれば、10歳までにきちんとした学習習慣がつかないと、そのあといろいろ勉強しても難しいんだということで、教室に普通に座って、普通に学習を続けるということの尊さみたいなものを改めて感じております。では、どうすればいいかという事になりますと、やはり入ってくる前に、保育園が苦勞していることは知っているんですけれども、そこと学校が手を合わせることで、乗り越えられる、乗り越えていかなければならないんじゃないかと思うようになりました。併せて、保護者の皆さんも、昔のように近くの幼稚園・保育園や小学校に通うという時代ではなくなって、田舎のほうですと、〇〇保育園と〇〇小学校が一体化するんですけれども、米子の場合はいろんなところに行ってらっしゃる。となると、本当に知り合いがいないうちで子どもが学校に通い、保護者も知り合いがいないうちで学校に入ってらっしゃる。非常に孤独感を感じておられ、子育ての悩みがあるというのを、目の前で感じました。

どうすればいいのか、ということで、思いついたのがこのことでした。先ほど、市長さんが「試行錯誤の様子だ」と言ってくださったんですけど、まさにそうでした、頭で描くと、保育園と幼稚園と小学校が連携すればいいんだという方程式なんですけれども、中身はどうかとなりますと、そこには、園長さんだったり校長だったり保護者だったり、いろんな思いがあるので、それをこうですって結論を出すっていうのは不可能な話でして、これは話し合っていて、ずれているところを調整してこれているのかなと思っています。

先ほど金川次長も話しましたが、来年から全校でやる、という私の就任当時から思いがあったんですけども、やはりそのズレを十分に修復できていないのに強引にやっていくというのは、結局やっただけになってしまうということで、事務局の方からの「こうした方がいいのではないか」という案も貰ったもので、確かにそうだ、焦ることはない、確実に進んでいるんだから、今年は0年次という形で、ある小学校でやってもらっているんですけども、来年からは全市でやっていくということで、そこでPDCAを回していけばいいだろうと思っています。ただ、このPDCAですが非常に細やかに、スピーディーに回したいと思っています。起こった段階ですぐ解決する。来年直そうとか、そういう姿勢ではなくて、じゃあどうすればいいかというのをすぐにやっていく、毎回毎回何かをやるたびにすぐにPDCAが回って、次に向けての準備が整うようにと思っています。そういうことを来年度やりたいと思っています。そうしたことで、子ども達が自分の持っている力を小学校、そして中学校で最大限伸ばし、自信をもって使っていける、そんな米子市に是非繫げたいと思っています。これはかなりしつこくやっていきたいなと思っています。市長さんの絶大なご支援もいただいているところですけども、また福祉保健部さんにもバックアップしていただいたり、共にやっているところですので、是非力を合わせて、「米子に学べ」と言っていただけたところまでなれば幸せだなと思っています。頑張っていきたいと思います。よろしくをお願いします。

○伊木市長

ありがとうございます。是非、一緒に頑張りたいと思います。よろしくをお願いします。

○荒川委員

今伺っていて、一市民としては「所管が違う」という感覚は、生活の中で全くありません。市役所の中ではいろんな部局があると思うんですけども、市民としても、子育てにおいても「所管が違うから」という感覚はない。ひとりの子どもを育てていく場所が米子であるという感覚を大切に考えていただきたいな、という思いと、もうひとつ教育長さんからありました「すぐ直す」ということ、子どもは学ぶ時期を選ばませんので、来年はないと言いますか、来年は一つ上の学年の違う学びがあるので、その辺は今おっしゃったとおり、すぐ対応していただけたら保護者としても嬉しいですし、子ども達も幸せだなと思いつつ伺わせていただきました。

○杵村委員

米子方式を作りたい、アピールしたいということだったんですけども、先日の厚労省の調査でもあったように、医師が多い、多数区域ということだったので、そのこともぜひ

織り込んで、縦の切れ目なく、横の線も繋がっていく、ひいては円になっていく体制を作り上げていただきたいと思います。

○伊木市長

そうしますと、「議事（２）ふるさと教育について」に参りたいと思います。ふるさと教育は教育委員会でも時間がない中で、時間を割いてもらって「ふるさと教育」には力を入れてもらっています。先般、市長部局の方で、総合政策課を中心に、加茂小学校に出かけまして、米子のことを学ぶ一つの機会を作りました。それを受けて子ども達も、いわゆる調べ学習、米子のことを調べて発表する、市報にも載っていますが、そんなような研究もしていただき、先般、子ども達から私も報告を受けたところでございます。非常に細かいところまで、良く調べてもらってまして、非常にいいものになったと思っています。実はこれをする大きな意味を私の立場から言いますと、観光もですけども、いろんなまちづくりをやっていくなかで、米子の人、ある程度中高年になるのかなとは思いますが、「米子って何もないんですよ」という言い方をする人が結構おられます。「米子の見どころはどこですか」と聞かれて、「米子は何もないんだよね、境の水木ロードに行ったらどう？」とかですね、良くある話だったんです。このことについて、米子に住んでいる人が、米子の良さを知らないのは本当に不幸だなと思います。本当にずっと、未来永劫米子に住んでもらおうという事だけではなくて、どこか県外に出かけて行って、あるいは全国、あるいは世界を舞台にして仕事をしていくにあたって、ふるさととのことが、心の奥底にあるとないのでは、力を発揮する力量が違ふと私は思います。ですので、将来どういう進路に進むにしても、ふるさととのことを心の奥底に持って行っていただきたい。そのことがその人にとって大きな力になるし、また米子の街の継続的な繁栄につながると思います。そういったことから、こういった取組をさせていただいているところでございます。

まずは、事務局の方から、ふるさと教育の取組について説明をしてもらって、それから委員さん方にご意見を伺いたいと思います。

○八幡総合政策課長

私どもの課が、この度なぜこのような取組をしたかという事については、先ほど市長さんがおっしゃられましたので、私の方から一つ申し上げたいと思います。いま移住定住の観点からアンケートをとっておりまして、それを見ますとやはり帰って来る一番大きな理由は「雇用」なんです、実は2番目に「馴染みがある」とか「愛着がある」といったことが、アンケートの結果で出てきた。そういうことも含めて、やはりふるさとにこだわりたいというなかで、こういう取組をさせていただいたというところでございます。

簡単に、この度の加茂小学校での取組みの経過についてご説明させていただきたいと思っております。まず小学校からこのようなお話がありまして、私どもとしまして、これは渡りに船だということで、まずは私が加茂小学校に行かせていただきまして、小学校のオフアールに基づいて、簡単に、米子ってこんなまちなんですよ、という話をさせていただきました。そのあと、これを受けて、加茂小学校から路線バスに乗って、概ね20人前後だったかと思っておりますけれども、市役所のそれぞれの課に来られて、いろいろと調べられた、という経過です。そのことを受けて、加茂小学校で発表会があったんですが、発表会の内容が、

お配りしております「広報よなご2月号」のとおりでして、市報に掲載させていただきました。「ヨナゴってこんなマチ」というところで、数々のインタビューの結果、子どもさんたちが調べられたものが載っているんですが、そこには市だけではなくて、消防や警察、いろんな関係者、地元の方々にも、協力をしてもらったという事で、当日はかなりの人数がこの発表会に参加しました。その後、市長が先ほど申し上げましたとおり、代表の方が「こんなまちにしてほしい」という市政要望とでも言いますか、それを直接市長に手渡しされまして、ひと段落というような形でございました。

この度の加茂小学校の件につきましては、随時、教育委員会事務局の学校教育課と連携をとりながら、させていただいたわけなんですけれども、これからいろいろなオファーがあったときは、すべて受けようということを総合政策部の中ではもう決めておりまして、今後、そのような話がありましたら、教育委員会のみならず、市長部局も全部で受け止めて、一緒になってやっていこうと思っております。

ちなみに、今年度につきましては、この度の加茂小学校のほかに、明道小学校のPTAの方が、市役所ってどんな仕事をしているのか知りたいという事がありましたので、それについても対応させていただきました。年々こういう活動が増えれば、子ども達の本市に対する愛着も深まっていくのかな、という思いで、継続してずっとこの取組については進めていきたいと考えているところでございます。

○金川学校教育課長

今、総合政策課からありましたが、やはりこのふるさと教育の推進に関しましては、学校だけではなくて、市全体で進めていかななくてはならないことだと思っております。

学校教育に特化した狭い部分で話をさせていただきますと、資料4、これは県の教育委員会の資料で、表題に「(検討中)」と書いてありますが、県の教育委員会もふるさと教育の推進という事で、来年度より本格的に進めていこうとしております。県の方針と全く違うものではなく、県の方針に沿いながら、米子市のふるさと教育というものを作っていこうと考えております。目的としましては、資料にもありますが、ふるさとへの誇りと愛着を醸成し、郷土を支える人材の育成、これがカギになって来ると思います。それをしていくために、加茂小学校の取組もまさにそれだったのではないかと思います。ふるさとのよさを学習し、それを外部に発信し、地域の課題を見つけ、その課題解決に向けた探求活動、これがひとつ大きなカギになるのではないかと考えております。いま加茂小学校、明道小学校の話が出ましたが、そこで特化してやっていることではありません。いろいろなやり方がありますが、生活課の中で、小学校1、2年生になりますが、地域を探検しながらいいところを見つけたり、地域の方と触れ合ったりという場面もあります。それから、小学校・中学校で総合的な学習の時間がございます。そういうところで、地域の方からいろいろなゲストティーチャーを招いたり、地域の歴史、地域の企業、いろんないいところを探っていくということを行い、学習発表会でありますとか文化祭、そういったところで発表しているという現状があります。米子市のふるさと教育ということですが、新たなものを作っていくということではなくて、まずはこの既存の取組、それから市の方で「ふるさと米子の先人に学ぶ」という道徳資料も作っております。そういうことと合わせまして、ふるさと教育をこれから各学校でどういうものを作っていくかということ、今後の目的

に向けて各学校で全体構想を作っていく、ふるさと教育の目的に向けたものを作っていくということを、来年度、各学校で全体の構想を進めていこうと考えております。

○伊木市長

今事務局の方から説明をしていただきましたふるさと教育についてですけれども、これについて皆さま方からご意見・ご質問などございましたら、ご発言をいただきたいと思えますいかがでしょうか。

○杵村委員

このふるさと教育については前回もこの会議で取り上げていただいて、教育委員会のみならず市民としての課題だと思っているんですが、私も、都会とか県外に出た時に、鳥取県出身とは言わずに「鳥取県米子市出身です」と必ず言うようにしています。ちょっと脱線するかもしれませんが、この度の高校野球に関しても県外の子が集まった高校が出るのではなくて、地元の高校、地元の子ども達が出場するという点に関して、とても盛り上がった気分があります。やっぱりそれも郷土愛から来るものだなあと感じていて、じゃあその大人が持っている郷土愛を今の子ども達が持っているかと思うと、子どもだからまだ分からないし、感じていない。じゃあ我が子、いま大学生なんですけれども、大学生が持っているかという点はまだやっぱり感じていないという現状です。ありがたみも分かっていないし、ここにいる郷土愛もまだ実感としては持っていないというのが現状だと思います。

先ほど金川次長から話があったんですが、私は「ふるさと米子の先人に学ぶ」を見たとき、とても目から鱗でして、知らないこと、知らない人、あるいは名前だけ知っているけど実際に何をした人なのか分からなかった方について書いてあって、野球の岡本監督のことですか、宇沢弘文さんのことも詳しく書いてあって、こういった郷土資料というのはとても大事だなと思っていました。特に、学校教育の中で若い先生方も知らないことが多くて、知らない先生が子ども達に教えるというのはとてもハードルが高い難しい部分があるので、そこを若い先生方にもふるさと教育をあえて強く感じとっていただけたらいいのかなということを感じています。

それから提案なんですけれども、前に別の会で、米子市の歌を学校で教えたかどうかという、雑談的な話をさせて頂いたことがあったんです。あれから気になって子ども達、成人式で「初めて聞いた、なんだ？」という感じで聴いていました。子どもの資料で、鳥取県小学校音楽研究会が出している鳥取県小学校の歌集というのがありまして、ここに鳥取県民謡の「湧き上がる力」が載っているんです。なので、将来的にこれが米子市の歌が載る郷土の本のところで、あるだけでも、音楽の時間に教えることができなくてもこれを見て小さい時から米子の愛着に触れる歌があるなということがいいかなということで、ちょっと持ってきました。一つの提案としてお話しさせていただきました。

○浦林教育長

歌集に、というのはなるほどなと心にメモをして帰りたいと思いますが、やはり私も成人式に出ておまして、米子市の歌が出来て3年目位で、今年の成人が高校生の頃にできたくらいだと思います。小学校の方には、やはり歌を覚えるのは子どもの時の方がよく頭

に入るので、皆が歌えるような状況にできないかということをお願いしております。今、4年生が公会堂で集います音楽会というのがあるんですけども、そこでは教員がオープニングで米子市の歌を歌っているそうです。「教員もいいけど子どもは歌わないの」と小学校の校長の方に若干お願いをしているところです。そういった形にできれば、成人式でもその歌が歌えるんじゃないかと思っております。

○杵村委員

時報のオルゴールだけじゃないですもんね。ちゃんと曲として聴けますもんね。

○浦林教育長

思わず口ずさんでしまう私もいますけれども、子ども達がそうなるのもっといいのかなって思います。

○荒川委員

ふるさと教育については、冒頭でも話させていただきましたけれども、米子にいる間に子ども達が引き出しに米子の情報とかをいっぱい吸収して、今気づかなくても、ある時パッと出て行く。例えば、今これだけグローバル化が進んでいる中で、米子から一歩出て、日本から出ていった時に、実は米子ってこうなんだよ、っていうのが米子にいるよりも、余計に分かりやすくなると思いますので、その時の準備として、今いかに小さい頃にスポンジに吸収するようにさせてやるのか、ということが大人の役割だと思います。米子市の歌もそうですし、ひいては成人式のあり方についても、学校で普通に小学校で座って普通に勉強する、大きくなっても普通に成人式をする、成人式だからといって構えて警備体制を敷くのではなくて、米子の成人式は普通に執り行えるような子育てができればいいなというふうに思うので、トータルの意味でも、それがすべて米子のふるさと教育だったらいなと望みたいです。

○金山委員

ふるさとの良さを知らせる、というところが第一にあります。これは加茂小の例で、さすがにやっているなという感じがしました。あと文科省の言っている「社会に開かれた教育課程」の中で、それをどう発信していくのかというのがあります。例えば川越市の「子ども大学」、小中学生からそういうところで学ぶとか。また、「学ぶ」「知らせる」の次は「創る」ことも必要かと思っています。このあいだ新聞を見ていたら、米子の良さを発信という、SNSでポイントづくりをするというようなことで、女子高生かギャルが集まるとか、そこが観光ポイントになっていくんだ、というところが結構ありますよね。これは仕掛けて作っていかないと、「こんなところが」という田舎の辺ぴな田んぼの中が、すごい観光スポットになって、全国的に集まってくるというポイントが結構ある。

何か米子市でも、観光課も含めて、それをもう少し仕掛けていって、創っていく、発信していくようなことができると、さらに米子の良さが広まっていくのかなと思います。

○伊木市長

金山委員からSNSの話をいただきました。米子市でも、今シティプロモーションと称して、米子の魅力をアピールする活動をしています。近年の情報の受け手のひとつの傾向ですけれども、かつてのようないわゆる広告宣伝というものが非常に効きにくくなっているということがあります。情報過多の時代において、あえて企業側とか自治体もそうですけれども、組織側からPR、売り込みがあると、何か抵抗感と言いますか、最初から拒絶感を示してほぼ見ないという傾向がある反面、いわゆる口コミ、誰かが言っているようなことは逆に信用する。仲間が言っているから信用すると。特にこれはSNSによってこの傾向は非常に強まっておりまして、その時に強制することは決してできないわけですが、そうした中において、米子は何もないみたいな発信が出ると、本当にそうになってしまうという危機感を持っております。ですので、ふるさとの良いところをたくさん見つけてもらって、ふとした瞬間に発信したくなるようなそんな状況を作り出すということが本当に重要なプロモーションとなりますので、そういったことに力を入れていきたいと思っております。

○浦林教育長

私も学校の教員をしておったときがあつて、学校に赴任すると、その学校がどんな歴史とか経過でできているか非常に興味があつて、例えば校歌は誰が作曲しているかとか、作詞が誰だとかを調べたりとかして。今はインターネットなんかで簡単に調べられたりしますし、地域の百年史とか学校の何十周年史とかを毎日持って帰って読んでいました。知ることがまずはスタートだと思っていたので、まず知っていく。そして、知ったことを子ども達に伝えたりとか、時々他の行事だとか、外からいらっしゃる方と繋げるとか、それが最終的には子ども達が自分達で学習の中で発信するような場面に繋がればという思いがありました。ですから、いま金山委員さんが言われたんですけれども、造るといふか創造するというのが、最終的にはそれがひょっとしたら米子市役所に戻ってきてやるのかもしれないし、違う立場でやるのかもしれない。まずは知っていく、それから知るだけではなくて、そういう方に触れるとか、行ってみて体験する。そして、それを今回加茂小が出しているように自分のレベルで発信してみる。それが将来の大きな創造というものに繋がるっていう。その大きなサイクルというのはいろんな教育の世界では大事にしていきたいなと考えております。学習指導要領に示されていることに基づいて学校教育はやらないといけないので、ふるさと教育を30時間しようというわけにはなかなかならないんですけれども、そもそも指導要領の作りというのが、地域のことを知ったり、ふるさとの良さを学ぶということが組み込まれておるわけです。ところがいろんな教科や領域にばらまかれているために、それを意識しないとよく分からないということがあります。例えば人権教育なんか全教科全領域でやると言っていますが、分かりやすくするために1枚ものにして、国語ではどんな人物の心情に触れればいいのかとか、道徳ではどういう力をつける、そのためには何をするかとか、そのように1枚のものにして見えるようにするという作業を学校ではよくします。これは道徳もそうですし、最初に次長が言っておりましたように、学校毎のふるさと教育の全体計画のようなものを、どの場面でどんなことをするんだというようなものをきちんとした形にして、それを意識して指導する。子ども達は例えばそういったものを蓄積していったりしながら、6年間でふるさとのことをこんなに

学べたとか、もしかして中学校まで繋げれば9年間でこんなことが学べたとか、そういうことがストックできていれば、大学生とか大人になってから振り返れるものになるかもしれないと聞きながら思いました。まずは色々やっているんですけれどもそれを意識して、見える化するというのが少し不足しているような気がしますので、指導する形にする、または学習したものをストックするような形をとっていくというような、すごく意識した形にできないかなというふうに思っております。鳥取県の良さも知らなければいけませんので、県の部分と米子の部分がかぶったりとか、今日は県の資料を用いましたが、こういうのを見ながら、市としてはこう、地域としてこう、学校としてどうというものになっていけば、子ども達にもっともっと振り返る機会が作れるのかな、そして学ぶ意味とかも分かるのかなというようなことを感じました。

○荒川委員

いま話の中で、見える化とか体験という意味で、例えば子ども達が外に出かける修学旅行ですとか社会科学習なんかで、米子から少しから離れたところで新しい地に行って米子との比較をしてみるだとか、成人式なんかでも毎年工夫を凝らした成人式をして頂いているんですけれども、例えば、そこで地域の文化芸能等の披露みたいなことがあっても、子ども達に伝わるのかなというふうに感じました。

ふるさと教育、オープンスクールとか切れ目のない支援体制等いいなと思う反面、私自身の中ですごく心配しているのが、やはり先生方の多忙感です。先ほど市長さんから、色々煩雑になっている部分もある、というところがあったかと思うんですが、先生方の役割が非常に大きくて、子どもに与える影響も大きいものですから、現場におられる先生方が疲弊されないように進行していただけたらなと、いろんな取組が新たに始まっていいなと思う反面、とてもそこは心配しているところです。

○杵村委員

先ほど、修学旅行の話で、子ども達が外に出た時にどう感じるかという話がありました。中学校の修学旅行で関西方面、京都や大阪で中学生が自由に歩き回るなかで自分のふるさとをアピールする、関西に観光に来ている人に対して米子アピールする、というものすごく子どもにとってはハードルの高いことがあって。でもそれをやることによって米子のことを改めて勉強できたりということがあったりして、その中でやっぱり希望としては米子城のことをちょっと入れたりとか、米子城そのものではなくてそのことを知るために米子の街を知ること大事だし、給食を通じて地場の食べ物を知ること大事だなと思っています。

八幡次長の話聞いて、ふるさと教育って結局、定住移住に関連して将来的には米子の活性化、あるいはその子ども達にとって米子の愛着を持たせるという意味で、定住が出来ない理由として、雇用が少ない、愛着が薄いということがありますが、私、考えて三つ目に「家から出たい」というのがあるんじゃないかなと思っています。家から出たい、つまり家庭教育にも問題があるんじゃないかというのがあったので、それも含めてふるさと教育を家の中でもやっていけないといけないなという風に感じました。

○伊木市長

今まで皆さんから言われたことはしっかりと踏まえて運用していきたいと思います。

杵村委員さんが最後の方に言われたことに私の方から付け加えますと、高校を卒業して就職をされる生徒ですけれども、鳥取県の方がアンケートを取りましたところ、7割の生徒が地元就職を希望したと。しかしながら、結果的に地元就職は3割にとどまっているということで、相差4割のギャップがあります。逆に言うと7割に入らない3割ぐらいの生徒には県外で自分の力を試したいというお子さんもいて、それはそれでいいことだと思ふんですけれども、少なくとも地元を希望する生徒が、地元で就職できるよう4割のギャップは何とか埋めたいと思っております、これは地元のいろんな企業も含めた情報発信というのがまだまだ弱いんだろうなど。これだけ今、有効求人倍率が上がっていて、選びさえしなければ仕事があるような状況が出ていますので、これをどういう風に今後充実させていくかということは、ふるさと教育とともに考えていきたいというふうに思っております。

○金山委員

日頃からずっと、臨機応変にやっていただいておりますが、学習指導要領について、来年度の小学校に続いて次の年には中学校でも本格実施になる。当然十分に検討して計算してやってきているわけですけれども、昨年、市長さんに英断をいただいた天変地異のことやら教育課程が急に変わってくるとかがあって、想定外のことが起こるとというのが考えられますので、ぜひ、特にこの学習指導要領について想定外のことが起きた時には、臨機応変に教育委員会も考えてきているし、市長さんの方も、教育長と相談を密にしていきたいです。

○伊木市長

災害は想定外がいつも起こるんですけれども、これは反射神経、普段からどれだけ常に柔軟な気持ちと心で、教育委員会の皆さんとも、何が起こるか分からないということは共有しながらやっていきたいと思っております。

用意した議事は以上になります。多少時間がありますので、今日のテーマに係わらず、気づいたことがありましたら伺いたいと思います。

今日あたりだとスマホのことが話題になっていましたね。先般PTA関係者と出会った時に、スマホのことが大分気になっておられました。親としても、これはどうすべきかというのは非常に悩ましいところもあるようでして、そういったことも含めまして、何なりとご意見をいただきたいと思っております。

○金山委員

先ほど私は学校の立場で聞いてみたらっていう話があったけど、スマホのことはやっぱり家庭の立場など思いが今までありますので、もし時間があったら話したいなという話をしておりました。

○杵村委員

ご存知の通り、昨日の発表が文科省の方からありました。防災対策として待たせたらいいんじゃないかという大阪府の見解がありましたけれども、それも踏まえた上で、米子の子どもは携帯・スマホがない想定で、学校で防災訓練を親への引き渡しまで行っています。何かがどう規模的に起こるか分からない災害ですけれども、携帯・スマホがない状態で学校生活・防災環境を考えているので、親としての立場、保護者としての立場としてはこのまま学校に持たせないという思いが強いです。しっかりその分、別の意味での防災を考えていますし、それを持つことによっての利点よりも持ったことによって起こりうる不安や問題の方が多いいのではないかという見解を持っています。

○伊木市長

おっしゃるとおり光と影じゃないですけども、防災だけ取り上げると、それはやった方が良くなるんですけども、それ以外の日常の時に、これをどうするかということです。学校でも持ってくると必ず電源つけてピロピロする子が出てくるだろうなというのは目に見えています。ただ、それも時代の流れもあるので、中学生で7割ぐらいが所有している実態があるように聞いております。随分と、この1、2年でだいぶ進んだなど、高校生ではほぼ100%とは聞いていましたけれども、中学でも、もうそれぐらいになっているとなると、かなり一気に進んでいるなという感があります。

○金山委員

学校の立場で言えば、校長としてもいろんな保護者と検討会を持ってきたりしておりますが、ひとつだけ心配なのは性的問題です。被害に遭う子が大変多いということについては、やっぱり研修会をPTAと一緒に行っていかないといけないと思います。

○荒川委員

色んな考え方があるな、というふうに思っております。いま大阪の方針等も聞きまして、保護者の方の気持ちも分からないではないんですけども、何かあった時に連絡をつける為にといいことですが、それを学校に持ち込んだ時に、今でもいろんな問題があるのに先生方はどうやって対応するのか。「家庭でこういうルールを作りました」「守りません」「夜寝れません」「勉強できません」「こういう問題が起きました、先生何とかしてください」って学校に持って来られても、それは先生方の学校の問題ではなくて、家庭ですべきところだと思いますので、いくらでも先生方の負担ばかりが増える心配をしまして、加えて「生きる力」、今行われている避難訓練等もそうなんですけれども、スマホがない前提で行われておりますし、いつのことだったか、災害が起きた時にスマホの充電が切れたということで、充電するのに長蛇の列ができていたというニュースをよく見ましたけれども、結局なくてもなんとかする力を持っておかないと、どうにもならないというのが明らかですので、「保護者の意見があったからこういう方向にしました」というような紙面での取り上げ方ではありましたが、その先の事を考えると、やはり学校での生活、盗難とかいじめ等の予測できる問題を考えただけでも先生方の負担を考えると私自身は必要ないんじゃないかと、むしろ、そうじゃないなくても生きていける子どもを育てるほうが重要だな、大切なことだなというふうに感じております。

○浦林教育長

私としては結論を出しているわけじゃないですけども、いろんな皆さんの意見をまず聞かないといけないというのが一番です。今おっしゃってくださったことは本当にごもつともですし、こういう問題というのは進んで欲しくなくても進むこともあるので、そういったことも予見しながら、突破されたらできなかつたではいけませんので、次のステップをイメージしながら考えておかないといけないと思っています。今、スマホに関しては子ども達の方が親よりも進んでいるために、親は分からないのに子どもがいろいろ覚えているということがあって、情報モラルの指導とかも学校で一生懸命やってもらっているんですけども、追いつかないというところもあるので、まずはここは強化して、保護者の方等にも研修はいろいろやってるわけなんですけれども、もっともっと理解をしていただいて、その上に今のような議論を重ねていく必要もあるかなという感じも持っております。注意しなければならぬと思っています。

○伊木市長

私事になりますが、ちょうど上の子が6年で、まさに中学に上がるということで、このタイミングでこういう時代になったなあと。家の中でも話はして、どうするべきかというのがあるんですけども、妻の意見は両委員さんとだいたい一緒です。こんなの与えるべきじゃないと。私はそれで持ちこたえられるかなと思っています。非常に激しいプレッシャーを受けておまして、「買え買え」というプレッシャーを。持つだろうかというのがあります。周りの子が買うと、なかなか抑えきれなくなる瞬間というのが訪れるんですね、これが。そうすると逆に持たせた前提での教育というんですかね、いわゆるスマホマナーじゃないですけども、歩きスマホはやめなさいとか、イヤホンした状態で自転車漕ぐとかですね。正直言って、その辺を徹底する方向に舵を切り始めているのが私の中にあります。金山委員も言われました、フィルタリングとかもしっかりしておかないと、多分それも突破していくんだらうなと思いつつも、そこも前提としていなければ駄目だらうなと思えますし、そういうスマホを持った前提でのマナーとかですね。

逆に、私なんかいろいろなところで講演とかやる時に、比較的年配の方のほうがマナーモードにしない人が結構いらっしゃる。中にはそのまま通話される人がおられたり、それを考えると、我々の世代もそうですけれども、マナーを学ぶ機会がなかつたんですよ。学ぶ機会がないままで機器の方が入ってきたと。せめて子ども達には、こういう時代になりましたので、スマートフォンも所有した前提でのマナーとか扱い方について、注意しなきゃいけないと、これを徹底していくことの方が、もしかしたらいいのかなということも個人的には思いつけております。まだこれも結論ではなくて、皆様方のご意見も伺いたいと思いつつも、もし持たせなくて済むならこんな楽なことではない、そういうようなことを感じております。

○荒川委員

すごくしんどいと思います。先程、私自身がスマホを持たせずに云々と言ったのは、学校に持ち込まない、今の大阪府の取組どうこうではなくて、米子市としては持ち込みを許

可するものではないという方の意見として捉えていただきたいと思います。家庭教育においては各家庭の考えがありますから。ただ、持たせないしんどさと、持った後のルールを守らせる大変さというのは同じぐらい大変だと思っております。

○杵村委員

家庭で持たせていても、学校への持ち込みを認めるかどうかを検討すべきところだと思います。

○金川学校教育課長

何かの事情で学校に持ってきた場合には、預かってまた返すという格好ですね。

○浦林教育長

非常連絡用みたいな形で、来たら担任に預けて帰りにもらって帰るという感じ。高校では音が鳴ったら没収とかそのようなことを子どもが言っていました。

○荒川委員

ルールを守るということが重要ということですね。

○伊木市長

それはいいかもしれませんね。鳴ったらそうなるよということを、子どものうちから覚えさせておいて、大人になってから、いろんな会議や映画を見に行ったり講演に行ったり、そういう時に鳴らさないという習慣が身につくのは良いことだと思います。

皆さま、その他よろしいでしょうか。

(なし)

○八幡総合政策課長

お疲れ様でした。そういたしますと、今年度は2回の総合教育会議を開催させていただきました。本日は、教職員の多忙感の解消については、データが集計しきれていないということで、この度の議題としては取り上げておりません。また、これについてはご報告させていただければと思います。

事務局からの連絡でございますけれども、来年度につきましては、これらの議題とともに、いわゆる地域での子育てというのが、今まさに求められている環境にあるのかな、というふうに考えております。その「地域」ということが、今、この行政を取り巻く中でも非常に言われておりまして、その辺りについては後で総合政策部長の方から若干補足をしたいと思っておりますけれども、そういうことを考えておりますのでよろしくお願ひしたいと思っております。また、委員の皆さん方からもこの会議で取り上げてほしいということがありましたら、引き続き連絡いただければと思います。

○大江総合政策部長

いま、日本の国全体で、将来的な課題として、移民のことも含めて人口の不足について議論されていますけれども、総務省が中心になって「自治体戦略2040」、約20年先の構想研究会が立ち上がってしまっていて、そこでの報告の中で、20年先を見つめた場合、特に若年層の労働力の絶対量が不足してくるということで、これに応じて社会全体が、人口が縮減していく時代のパラダイムを変えていかななくてはならないというのがあります。個々の自治体で考えた場合、人口が少ないということは税収が少なくなる可能性がある。そういう時に、公共、特に市町村レベルとしては、できないことも結構出てくるんだろうと、出来ること、出来ないことを明確にして、地域においてそこを補完していただく、「公」と「共同」の部分と、個人の「私」、「公・共・私」の協力関係を見つめなおしていかなくてはいけないというのが、非常に大きな問題としてあります。今日話が出たふるさと教育なんかもまさにそれなんですけれども、やはり人口が劇的に増えるような特効薬というのはないです。米子市は、鳥取県の中では減少率が少ないですけれども、よく見ると、周りの市町村から転入してきた方で支えられている。これは広域的に見たら問題解決にはなっておりません。今後米子の人口の減り方を少なくしていくには、それこそ米子にゆかりのある人、出身者で気に入ってくれた人を持ってくるというのがあって、それも先ほどのふるさと教育、地域における子育てによって米子への愛着を、大学に行くなどかすぐに帰って来いとは言わないけれども、20年先30年先に帰って来る、あるいは、常にこちらを見ていて、それこそふるさと納税みたいな形でどんどんこちらに目を向けていただくというようなことが必要ではないかと思っています。

こういうことも念頭に置きながら、20年先を見据えながら教育の分野でもその辺を考えて、地域における子育てを進めていかななくてはいけないなというのがあります。事務局として総合政策部も関わらせていただいておりますので、来年度以降、その方向も出していきたいと考えておりますのでよろしく願いいたします。

○八幡総合政策課長

そういたしますと、以上で第2回米子市総合政策会議を閉会いたします。
ありがとうございました。

11時00分閉会